

## 惣 領 浦 之 前 遺 跡

能越自動車道氷見南 I C 建設に伴う発掘調査報告

2016年3月

氷見市教育委員会

## 序

東に富山湾を隔てた靈峰立山を仰ぐ氷見市は、古くから海の幸、山の幸に恵まれ、人々の生活の場として、数多くの文化遺産を生み育んできました。これら、郷土に残る文化財は先祖より受け継がれてきたものであり、私たちはあらためてその歴史的、文化的価値を再認識しながら、末永く子孫に引き継いでゆかねばなりません。

このたび発掘調査の対象となった惣領地区は、古くから惣領古墳群や惣領遺跡の存在が知られていたほか、丘陵上には飯久保城跡の詰城とされる惣領砦跡が所在するなど、豊かな歴史遺産に恵まれた土地です。

また、地区を縦断する能越自動車道の建設に伴って実施された惣領浦之前遺跡の発掘調査では、弥生時代の土器や大量の木製品が出土しています。特に富山県内では初の出土例となった朱漆塗りの木製盾は大きな話題を呼びました。

今回、その惣領浦之前遺跡で実施した発掘調査は、狭い面積での調査ではありましたが、弥生時代から古代、中近世の資料が出土し、興味深い調査成果を残すことができました。これら調査の成果を、惣領地区、ひいては氷見地域の歴史に思いを馳せる手がかりとしていただければ幸いです。

おわりになりましたが、発掘調査にあたり文化財保護の趣旨にご理解とご協力をいただいた関係者の皆様、そのほかご指導、ご協力を賜りました多くの方々にこの場をお借りして厚くお礼申し上げます。

平成28年3月

氷見市教育委員会  
教育長 山本 晶

## 例　　言

- 1 本書は、平成27年度に調査を実施した富山県水見市**悲領地**内に所在する**悲領浦**之前遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 調査は、能越自動車道水見南IC建設に先立ち、水見市能越自動車道対策室の依頼を受けて、調査主体者である水見市教育委員会の監理の下、株式会社エイ・テックが実施した。
- 3 調査面積は236.0m<sup>2</sup>である。
- 4 調査期間は、平成27年5月29日～同年6月26日（実働17日）である。

- 5 整理作業は、遺物洗浄・注記等基礎的な作業は調査と並行して実施し、遺構図面作成、遺物実測、報告書作成・編集は調査終了後、平成28年3月14日まで実施した。
- 6 調査事務局は、水見市教育委員会教育総務課に置いた。事務担当者は次のとおりである。

課　　長：草山利彦

副　主　幹：大野　究

生涯学習・文化財総括担当：小谷　超

主任学芸員：廣瀬直樹

- 7 発掘調査担当者は次のとおりである。

監　督　員：水見市教育委員会　教育総務課　廣瀬直樹

主任調査員：株式会社エイ・テック　岡田一広

調　査　員：株式会社エイ・テック　藤井秀明

- 8 本書の執筆は、第1章・第2章第1節を廣瀬が、その他を岡田が担当し、編集は岡田が実施した。

- 9 自然科学分析は、珪藻分析、花粉分析を株式会社パレオ・ラボが実施し、文責は文末に記載した。

- 10 出土遺物と調査に関わる資料は、水見市教育委員会教育総務課が保管している。

- 11 遺跡の略号は「SRUM2015」とした。

- 12 土層の色調は農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版標準土色貼』に準じている。

- 13 遺物の施釉陶磁器の釉のかかる範囲は一点鎖線で表した。

- 14 調査参加者は次のとおりである。

発掘作業員：竹岸勇一・小島俊文・中村伴行・藤岡　勇・前田吉雄・村田重政（水見市シルバー人材センター）

中山賢富・二口誠治

発掘補助員：小林　央・坂田智恵・松本真由美

整理作業員：相佐啓子・阿原智子・上田恵子・坂田智恵・前馬みゆき・松本真由美・三島幸代・渡辺悦子

（以上、株式会社エイ・テック）

- 15 調査・本書作成にあたり、下記の方々・機関から多大なご教示・ご協力を得た。記して感謝申し上げる。

株式会社岡部　水見市建設農林水産部建設課

（敬称略・五十音順）

## 目 次

第1章 遺跡の環境	1
第1節 地理的環境	1
第2節 歴史的環境	1
第2章 調査の概要	5
第1節 調査に至る経緯	5
第2節 調査の経過	5
第3章 調査の成果	7
第1節 基本層序	7
第2節 遺構	7
第3節 遺物	8
第4章 自然科学分析	11
第1節 花粉分析	11
第2節 珪藻分析	15
第5章 まとめ	19

## 表 目 次

第1表 周辺の遺跡対応表	3
第2表 遺物観察表	10
第3表 産出花粉胞子一覧表	12
第4表 惣領浦之前遺跡 S X01堆積物の特徴	15
第5表 S X01堆積物中の珪藻化石産出表	16

## 図 目 次

第1図 周辺の遺跡（1／25,000）	2
第2図 惣領地区の既往調査位置図（1／2500）	4
第3図 惣領浦之前遺跡 調査区位置・グリッド配置図（1／1,000）	6
第4図 基本層序模式図（1／20）	7
第5図 惣領浦之前遺跡における花粉分布図	13
第6図 惣領浦之前遺跡 S X01から産出した花粉化石	14
第7図 堆積物中の珪藻化石分布図	17
第8図 惣領浦之前遺跡 S X01堆積物中の珪藻化石の顕微鏡写真	18
第9図 調査区全体図（1／200）	21
第10図 遺構配置図（1／100）	22
第11図 調査区東壁土層断面図（1／40）	23
第12図 遺構実測図（1）（1／40・1／80）	24
第13図 遺構実測図（2）（1／40）	25
第14図 遺物実測図（1／2・1／3）	26

## 写 真 図 版 目 次

図版1 遺跡周辺空中写真（1952年米軍撮影）	
図版2 遺跡周辺空中写真（2009年国土地理院撮影）	
図版3 1. 調査区全景（北西から） 2. 調査区全景（西から）	
図版4 1. S A01・S X01検出状況（西から） 2. S A01・S X01検出状況（南西から）	
図版5 1. S A01・S X01完掘状況（北西から） 2. S X01完掘状況（南西から）	
図版6 1. S X01土層（南西から） 2. S D01土層（北西から）	
図版7 遺物写真	

## 第1章 遺跡の環境

### 第1節 地理的環境

氷見市は、富山県の西北部に位置し、能登半島の基部東側にあたる。昭和27年の市制施行から昭和29年までに旧太田村を除く氷見郡1町17村が合併し、現在の氷見市が成立した。面積は約230km<sup>2</sup>、人口は約5万人である。

市域は、北・西・南の三方が標高300~500mの丘陵に取り囲まれ、これら丘陵から派生する小丘陵により、西条・十三谷・上庄谷・八代谷・余川谷・灘浦の6つの区域に分けられる。また市の東側は、約20kmの海岸線をもって富山湾に面している。市の北半部は、上庄川・余川川・阿尾川・宇波川・下田川といった小河川とその支流からなる谷地形であり、上庄川流域以外はまとまった平野が少ない。一方、市の南半部は、主として布勢水海（十二町潟）が堆積してきた平野と、その砂嘴として発達した砂丘からなる（氷見市1999・2000）。

惣領地区は、仏生寺川中流の西北岸に位置する。東南方は小平地で水田地帯が広がり、西北方は丘陵が続く（氷見市2000）。惣領浦之前遺跡は、仏生寺川の支流である鞍骨川北岸の平野に位置し、北側を小丘陵に接する。標高は約7.5~8.5mを測る（財団法人富山県文化振興財團埋蔵文化財調査事務所2010）。

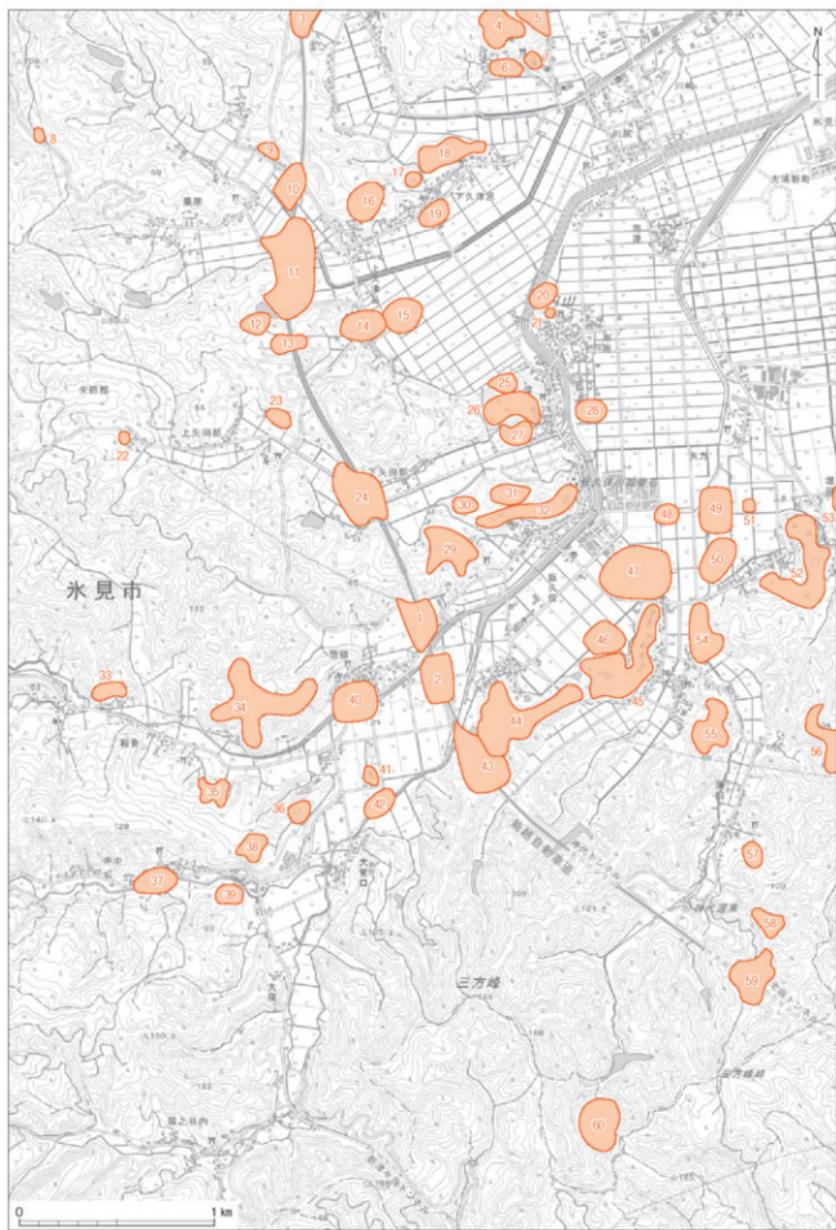
### 第2節 歴史的環境

惣領浦之前遺跡は、旧称NEJ-16遺跡、能越自動車道の建設に先立つ分布調査で発見された遺跡である。能越自動車道の建設に先立って、平成15年度に実施された本発掘調査では、縄文時代後期初頭から晩期の自然流路や土坑、弥生時代後期の溝、古代から中世の集落跡が検出された。このうち弥生時代後期の溝からは、朱漆塗り盾や武器形木製品など祭祀に関わりのある遺物が出土した（財団法人富山県文化振興財團埋蔵文化財調査事務所2010）。

鞍骨川を挟んだ対岸には惣領野際遺跡が所在する。惣領浦之前遺跡と同じく、平成15年度に能越自動車道建設に先立つ本発掘調査が実施された惣領野際遺跡では、縄文時代晚期中葉から弥生時代後半の自然流路、古墳時代初頭の自然流路や溝、中世前半の集落跡が検出されている（財団法人富山県文化振興財團埋蔵文化財調査事務所2010）。

鞍骨川の上流、惣領浦之前遺跡から約300mの地点には惣領遺跡が所在する。惣領遺跡では、昭和49年の鞍骨川改修工事の際に、地表下約3mの地点から遺物が出土している。出土資料は、古墳時代中期と奈良時代から平安時代初期を主体とし、若干であるが古墳時代後期の資料を含む。惣領遺跡の西南側丘陵上には、中期古墳と推定される惣領コツデラ古墳群、南側の独立丘陵には後期古墳である惣領古墳群が立地し、それら古墳群との関連が指摘されている（氷見市2002）。

惣領浦之前遺跡の西南、標高101.9mの丘陵上には惣領砦跡が所在する。規模は400×140m、東西方向にのびる尾根上に連なって築かれた三か所の主要な郭と帯郭、十三本の堀切、土橋によって構成される堅固な繩張を持つ戦国時代の山城で、越中國人狩野氏の出城と伝えられる。越中狩野氏について出自は不明だが、加賀を本拠とした室町幕府奉公衆の狩野氏の系譜と推定されている。惣領砦跡の西には鞍骨山城跡（御林山城跡）、東には飯久保城跡が所在している。『越中志微』によれば、狩野氏が鞍骨山城を本城として、惣領、飯久保に砦（出城）を構えたといい、惣領砦には家老大前左近と奥野主馬が在

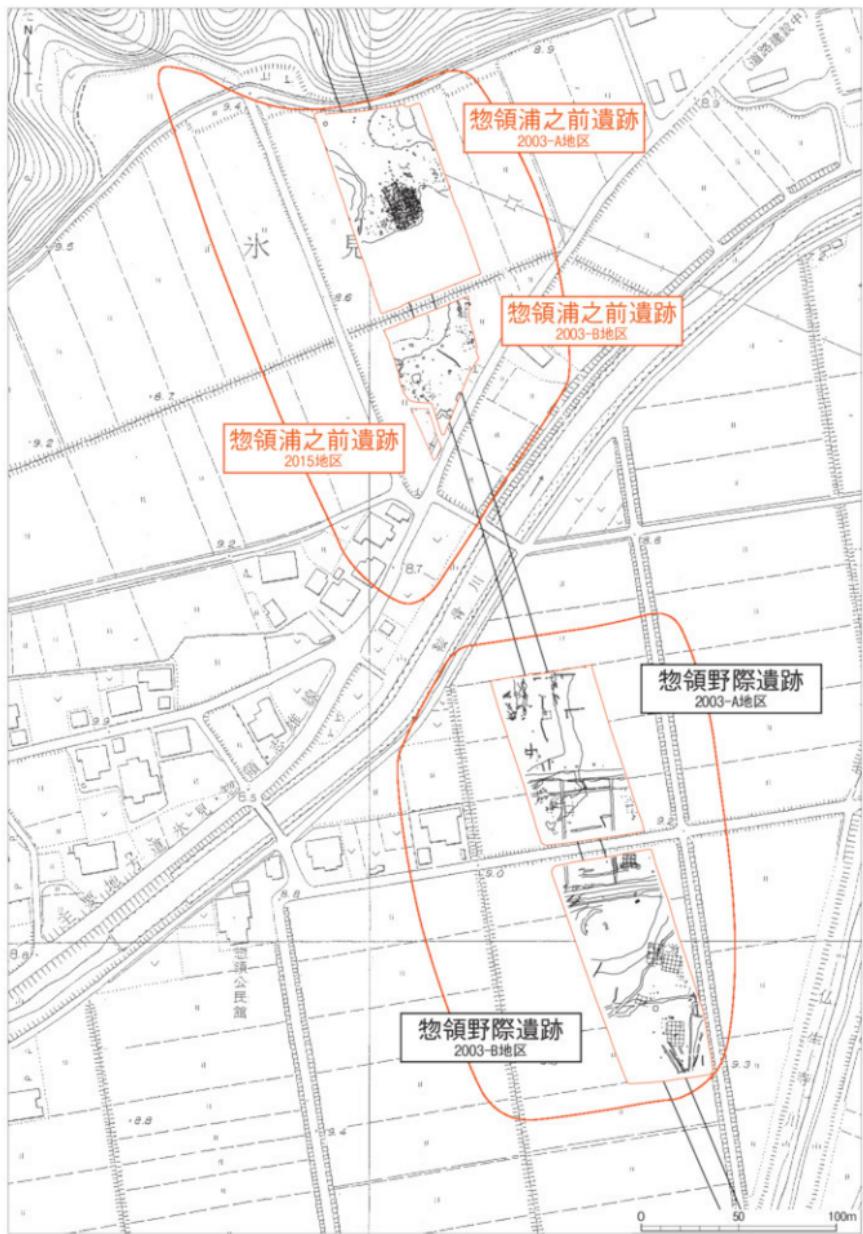


第1図 周辺の遺跡 (S = 1 / 25,000)

城したとされる。だが城跡の縄張や規模から見ると、狩野氏の本城は飯久保城であり、惣領砦と鞍骨山城は詰城としての役割をもつていていたと考えられる（氷見市教育委員会2001）。

No.	遺跡名	遺跡番号	種別	時代	No.	遺跡名	遺跡番号	種別	時代
1	惣領砦之前遺跡	312	集落	縄文・弥生後・古墳・中世	31	飯久保後山遺跡	267	散布地	縄文・弥生・近世
2	惣領野面遺跡	311	集落	古墳前・中世	32	飯久保後山古墳群	266	古墳	古墳中・後
3	中谷内遺跡	274	集落	古墳中・後・奈良・平安・近世	33	鞍骨前原遺跡	331	祭祀	中世
4	万尾城跡	339	城郭	戰國	34	惣領砦跡	128	城郭	戰國
5	万尾遺跡	063	散布地	弥生後～近世	35	船井オヤノヤチ遺跡	282	散布地	古代・中世末～近世初
6	万尾日遺跡	275	散布地	弥生～近世	36	惣領コツラ古墳群	284	古墳	古墳中
7	万尾古墳	285	古墳	古墳前	37	寺中向遺跡	283	散布地	中世
8	栗原ミナト遺跡	294	散布地	古墳	38	惣領コツラ城跡	263	城郭	戰國
9	栗原日遺跡	278	散布地	不明	39	寺中竹尾城跡	264	城郭	戰國
10	栗原八遺跡	277	集落	古代～近世	40	惣領遺跡	084	散布地	古墳中・古代・中世
11	上久津沟中尾遺跡	315	集落	縄文・弥生後・古代・中世	41	惣領古墳群	073	古墳	古墳後
12	上久津呂ゴタンダ山遺跡	071	散布地	縄文・古墳	42	惣領日遺跡	130	散布地	古墳～古代
13	NEJ-18遺跡	314	散布地	縄文・古代・中世	43	正保寺遺跡	235	散布地・寺院	縄文～弥生・古代～近世
14	上久津呂日遺跡	113	散布地	縄文～古代	44	飯久保城跡	075	城郭	戰國
15	上久津呂A遺跡	066	散布地	古代	45	光西寺山古墳群	143	古墳	古墳前～後
16	上久津呂C遺跡	158	散布地	中世	46	飯久保山ノ下遺跡	281	散布地	古代・中世
17	下久津呂古墳	346	古墳	弥生末～古墳初	47	飯久保ナガモン遺跡	228	散布地	古代
18	久津呂城跡	065	城郭	戰國	48	博代ハタケダ遺跡	195	散布地	中世
19	下久津呂遺跡	276	散布地	中世	49	神代羽瀬遺跡	074	散布地	縄文～近世
20	布施八ヶ田遺跡	056	散布地	縄文後・古代	50	石崎遺跡	125	散布地	古代・中世
21	布施門山古墳	357	古墳	古墳	51	細田モノノ田塚	185	塚	中世
22	矢田部カワベリ遺跡	280	散布地	中世	52	細田ニキ塚山古墳群	171	古墳	弥生末～古墳初・古墳後
23	矢田部六反坪遺跡	269	散布地	中世	53	細田竹浦遺跡	245	散布地	弥生後・古代～近世
24	NEJ-17遺跡	313	散布地	縄文～近世	54	矢ノ方一丁目遺跡	077	散布地	弥生末～古墳
25	深原前田遺跡	265	散布地	古代～近世	55	博代城跡	169	城郭	戰國
26	深原古墳群	358	古墳	古墳中～後	56	細田城跡	154	城郭	戰國
27	深原打越遺跡	279	散布地	古代	57	細田日造跡	232	散布地	中世
28	布施若日遺跡	291	散布地	古墳	58	細田長尾遺跡	229	塚	中世
29	惣領古戸遺跡	286	城郭	中世	59	細田八遺跡	230	城郭	中世
30	矢田部ナカタ遺跡	268	散布地	中世	60	博代テラヤシキ遺跡	184	寺院	中世

第1表 周辺の遺跡対応表



第2図 惣領地区の既往調査位置図 ( $S = 1/2,500$ )

## 第2章 調査の概要

### 第1節 調査に至る経緯

平成19年4月15日に開通した能越自動車道水見ICから高岡北IC間（水見高岡道路）の延長11.2kmのうち、ほぼ中間地点にあたる惣領地区に、水見南IC（仮称）の追加設置されることになった。現在、平成27年度末の開通を目指して建設工事が進められている。

水見南IC（仮称）の建設地は、惣領浦之前遺跡の所在地にあたる。平成15年度には、財團法人富山県文化振興財團埋蔵文化財調査事務所によって能越道本線の建設に先立つ惣領浦之前遺跡の本発掘調査が実施された。今回計画されたダイヤモンド型のIC建設については、その施工対象地の大部分が平成15年度の既調査部分に該当することになった。ただし、水見南IC（仮称）から主要地方道水見・惣領・志雄線への連結部分236mについては、本発掘調査の対象外であり、あらためて調査が必要となつた。

平成27年度中の開通のためには、平成26年度中に本発掘調査を実施する必要があり、そのため試掘調査は平成25年度には実施する必要があった。ただ、調査対象地は周辺でのIC建設工事等のための残土置き場となっていたため、その工事の進捗状況に応じて、残土を除去しなければならず、試掘調査は平成26年3月にずれ込むことになった。

水見市教育委員会による試掘調査は、天場山南遺跡および小窪瓦窯跡の試掘調査の合間である平成26年3月18日に実施した。なお調査対象地は、平成15年度に富山県文化振興財團が本発掘調査を実施し、弥生時代を主体とする多数の遺構・遺物が検出された範囲に接する。そのため、調査は層位の確認を主眼とした。

試掘調査の結果、平成15年度の本発掘調査の結果とも合致する層位が確認され、弥生時代から中世の遺物が出土した。この結果に基づき、本発掘調査に向けた準備作業を開始したが、最終的には水見市能越自動車道対策室との協議のうえで、本発掘調査を平成27年4月以降に実施することになった。

本発掘調査は、調査主体者である水見市教育委員会の監理のもと、民間調査機関が実施することで調整を行った。平成27年度には、調査は株式会社エイ・テックが担当することが決定し、現地調査を開始した。

### 第2節 調査の経過

#### （1）調査の方法

本調査にあたって、表土を重機で掘削後にグリッドを5m間隔に設定した。グリッドは日本測地系平面直角座標系第VII系を用い、東西をY軸、南北をX軸とした。X軸方向に南からアルファベット、Y軸方向に西からアラビア数字を割り振ってグリッド番号を設定し、南西隅を基準とした（第3図）。A1の座標は、X=89245、Y=-18980である。

表土掘削後、引き続き側溝掘削、包含層掘削、遺構検出を実施した。遺構は半截もしくはセクションベルトを残して掘削し、土層を記録した後完掘した。遺構の測量はトータルステーションにより平板測量を実施した。

#### （2）調査の日程

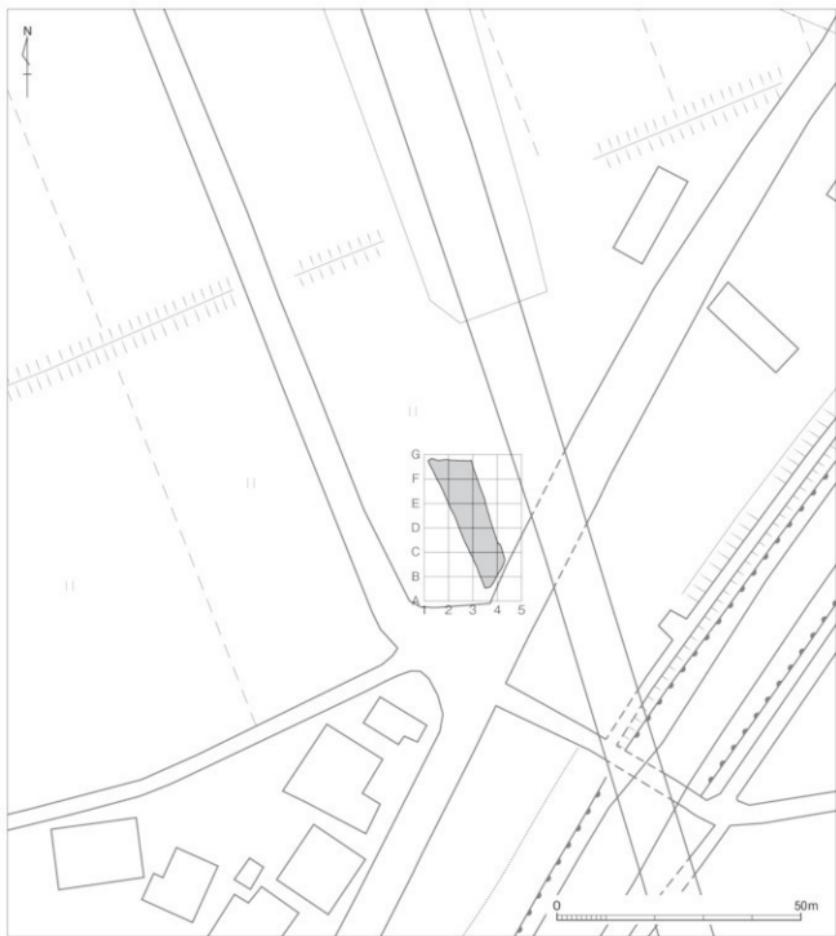
5月29日より調査を開始し、現場事務所設営およびバックホウによる表土掘削を実施した。表土除去

が済んだ箇所から順次人力による遺物包含層掘削、側溝掘削およびグリッド杭打設を実施した。遺物包含層である第VI層上面から掘り込むSA01を検出したため、土層図作成、平板測量、完掘撮影の記録作業をした後、引き続き包含層掘削を実施した。第VI層を除去した後、遺構検出を実施し検出写真撮影後に遺構掘削を実施した。

遺構掘削と同時に土層図作成、完掘撮影およびトータルステーションにより平板測量を実施した。

調査区東壁からSX01の覆土および地山のサンプルを採取し、遺跡周辺環境を復元するために花粉分析、珪藻分析を実施した。

6月22日に全景撮影を実施し、6月26日に埋め戻し、資材撤収およびハウスを撤去して調査を終了した。



第3図 惣領浦之前遺跡 調査区位置・グリッド配置図 ( $S = 1/1,000$ )

## 第3章 調査の成果

### 第1節 基本層序

調査区は南北方向に細長く設定した。ほ場整備で造成されているため水平である。

基本層序は、第Ⅰ層：水田耕作土（黒褐色細粒砂質シルト）、第Ⅱ層：床土（褐灰色細粒砂質シルト）、第Ⅲ層：中世以降の遺物包含層（黒褐色細粒砂質シルト）、第Ⅳ層：古代の遺物包含層（黄灰色細粒砂質シルト）、第Ⅴ層：地山（灰白色粘土）である。第Ⅰ層は厚さ30cm、第Ⅱ層は10~20cmである。調査区東側を南北に走る暗渠の掘り込みは第Ⅰ・Ⅱ層では確認できず、第Ⅲ層以下で検出したため、第Ⅰ・Ⅱ層は現代のは場整備により造成したものである。第Ⅲ層は中世以降の遺物包含層で、中世以降の覆土となる。厚さは5~13cm堆積する。第Ⅳ層は古代の遺物包含層で、上面は中世以降の遺構横出面である。厚さは10~29cm堆積する。第Ⅴ層は地山で、上面は古代遺構の横出面である。

### 第2節 遺構

今回の調査では、柵址（S A）2条、溝（S D）1条、土坑（S K）1基、凹地（S X）1箇所、ピット（S P）11基を検出した。

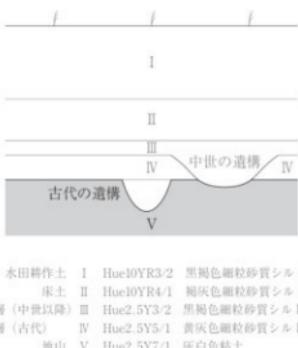
#### 柵址

S A01（第12・13図） 調査区南側、グリッドB 3~D 3の範囲に位置する。柱穴5基からなる柵址で調査区外に延びる可能性がある。軸方位はN -24° - Eで、S A02およびS X01と平行する。溝S D 01より新しい。柱穴の芯々間における検出長は6.60mで、柱間は1.70mを基本とし、北から1.70m - 1.70m - 1.58m - 1.68mを測る。柱穴は、平面形が円形ないし稍円形で、直径0.30~0.42m、深さ0.42~0.63mを測る。遺物は出土していない。

S A02（第12・13図） 調査区南側、グリッドB 3・B 4の範囲に位置する。柱穴3基からなる柵址で調査区外に延びる可能性がある。軸方位はN -25° - Eで、S A01およびS X01と平行する。柱穴の芯々間における検出長は3.14mで、柱間は、北から1.58m - 1.54mを測る。柱穴は、平面形は円形で、直径0.26~0.32m、深さ0.47~0.49mを測る。遺物は出土していない。

#### 土坑

S K01（第12図） 調査区の北側、グリッドF 2・F 3の範囲に位置する。平面形は不定形で、規模は長軸1.44m、短軸0.44m、深さ0.15mを測る。遺物は出土していない。



第4図 基本層序模式図 (S = 1 / 20)

水田耕作土	I	Hue10YR3/2	黒褐色細粒砂質シルト
床土	II	Hue10YR4/1	褐灰色細粒砂質シルト
遺物包含層（中世以降）	III	Hue2.5Y3/2	黒褐色細粒砂質シルト
遺物包含層（古代）	IV	Hue2.5Y5/1	黄灰色細粒砂質シルト
地山	V	Hue2.5Y7/1	灰白色粘土

## 溝

S D01（第13図） 調査区南側、グリッドB 3・C 3の範囲に位置する。南東～北西方向に走る流路で、南側は凹地S X01に切られる。遺構の検出は古代遺物包含層（第IV層）下の地山（第V層）面からである。検出長3.40m、最大検出幅0.30m、深さ0.03～0.05mを測る。遺物は出土していない。

## 凹地

S X01（第12図） 調査区南側、グリッドA 3～C 4の範囲に位置する。南北方向に走る浅い溝状で、東側は一段低くなり、調査区内では東岸が検出できなかったため凹地とした。なお、S X01の東側には県道水見・惣領・志雄線を挟んで鞍骨川が北流しており、この川へ向かって徐々に低く傾斜する地形の可能性もある。溝S D01より新しい。また、柵址S A01・02と西岸が平行するため、この柵址は附隨施設の可能性がある。覆土は中世遺構の遺物包含層である第III層を基調とする。検出長9.0m、最大検出幅3.50m、深さ0.21mを測る。出土遺物は珠洲焼、越中瀬戸である。

## 第3節 遺物

今回の調査では、弥生土器、古代土師器、古代須恵器、珠洲焼、青磁、瀬戸美濃、越中瀬戸、肥前、伊万里、近代陶磁器、石器（擦切具、叩石、剥片）が遺物整理箱1箱分出土した。本書ではそのうち18点を図示した。遺物の記載は種別ごとに行い、観察表にデータを記載した。

なお、珠洲焼は吉岡康暢氏の器種分類および7期編年（吉岡1994）に準拠した。暦年代はI期：12世紀後半、II期：13世紀前半、III期：13世紀中葉～1270年代、IV期：1280年代～1370年代、V期：1380年代～1440年代、VI期1450年代～1470年代、VII期：1480年代～1500年代と比定されている。

### （1）土器・陶磁器類（第14図）

#### 弥生土器

1は壺の底部である。

#### 須恵器

2は壺の口縁部である。胴上部は内面が同心円当て具痕、外面はタタキであるが自然釉が厚く付着しており工具は不明である。3は瓶類の肩部である。4は壺の口縁部である。外面に波状文を施す。

#### 珠洲焼

5・6は片口鉢の口縁部である。いずれもオロシ目部分は欠損する。5はIV期である。6はIII～IV期である。7は片口鉢の体部である。オロシ目が密で、V期である。8は壺の胴部である。外面はタタキ、内面は当て具痕の後ナデアゲを施す。

#### 青磁

9は碗の口縁部である。外面に細い蓮弁文を施す。

### 越中瀬戸

10は皿の口縁部である。内外面に灰釉を施す。11は段重の口縁部である。内外面に鉄釉を施す。12は擂鉢の口縁部である。内外面に青釉を施す。

### 伊万里

13・14は椀・皿類の底部である。いずれも外面は呉須染付を施し、高台畳付には離れ砂が付着する。15は丸型の紅猪口の底部である。

### (2) 石器 (第14図)

16は珪化木製の擦切具である。一部欠損する。擦切痕が明瞭でないことから、未成品の可能性もある。17は砂岩製の石錘である。両端は打ち欠きを施す。一部には叩打痕がある。18は能登半島福剛崎周辺で産出する横山真脇石製の剥片である。

## 土器・陶器類

No.	グリッド 出土遺構	層位	種類	器種	法量(cm)			胎土	焼成	色調	残存率
					口径	器高	底径				
1	試掘坑		弥生土器	甕	—	(2.3)	6.6	やや密	良	10YR6/4 にぶい黄橙色	底部 2.0/12
2	C3	Ⅲ層	須恵器	壺	8.7	(5.0)	—	密	良	10YR6/2 灰黄褐色	口縁部 0.8/12
3	C3	Ⅲ層	須恵器	瓶類	—	(3.8)	—	密	良	5Y6/1 灰色	—
4	C3	IV層	須恵器	甕	46.9	(1.8)	—	密	良	10G6/1 緑灰色	口縁部 0.5/12
5	C4	II層	珠洲鏡	片口鉢	28.4	(3.5)	—	密	良	5Y5/1 灰色	口縁部 0.5/12
6	C3	Ⅲ層	珠洲鏡	片口鉢	28.0	(7.3)	—	密	良	5BG7/1 明青灰色	口縁部 1.0/12
7	SX01	1層	珠洲鏡	片口鉢	—	(3.8)	—	密	良	10BG4/1 暗青灰色	—
8	C4	Ⅲ層	珠洲鏡	壺	—	—	—	密	良	10G6/1 緑灰色	—
9	C4	Ⅲ層	青磁	椀	11.7	(2.1)	—	密	良	7.5Y6/1 灰色	口縁部 0.8/12
10	C3	Ⅲ層	越中瀬戸	皿	12.0	(1.4)	—	密	良	10YR6/3 にぶい黄橙色	口縁部 1.0/12
11	SX01	1層	越中瀬戸	段重	10.8	(2.1)	—	密	良	10YR7/3 にぶい黄橙色	口縁部 1.5/12
12	B4	Ⅲ層	越中瀬戸	搖鉢	27.4	(2.1)	—	密	良	10YR8/4 浅黄褐色	口縁部 0.8/12
13		I層	伊万里	椀・皿類	—	(1.2)	4.7	密	良	10YR8/1 灰白色	底部 1.5/12
14	E2	II層	伊万里	椀・皿類	—	(1.3)	4.9	密	良	10YR8/1 灰白色	底部 2.8/12
15	C3	Ⅲ層	伊万里	紅口口	—	(1.6)	1.2	密	良	10YR8/1 灰白色	底部 5.0/12

法量 - 器高の( )は残存高

## 石器

No.	グリッド 出土遺構	層位	種類	石材	法量(cm・g)				備考
					全長	全幅	全厚	重量	
16	C1・2	II層	切削具	珪化木	13.9	3.6	1.4	103.3	一部欠損。
17	C1・2	II層	石鍤	砂岩	6.4	5.1	1.9	82.3	両端を打欠。叩打痕あり。
18	C1・2	Ⅲ層	剥片	横山真鶴石	4.7	2.2	0.6	6.0	能登半島福崎崎周辺に産する玉鶴泥岩。

第2表 遺物観察表

## 第4章 自然科学分析

### 第1節 花粉分析

#### 1. はじめに

富山県氷見市に所在する惣領浦之前遺跡において花粉分析用の試料が採取された。以下では、試料について行った花粉分析の結果を示し、堆積当時の古植生を検討した。

#### 2. 試料と分析方法

分析試料は、地山とされる2.5Y7/1灰白色粘土とS X01覆土（中世遺物包含層＝第Ⅲ層）の2.5Y3/2黒褐色細粒砂質シルトの計2点である。これらの試料について、以下の手順にしたがって花粉分析を実施した。

試料（湿重約3～4 g）を遠沈管に取り、10%の水酸化カリウム溶液を加え10分間湯煎する。水洗後、46%のフッ化水素酸溶液を加え1時間放置する。水洗後、比重分離（比重2.1に調整した臭化亜鉛溶液を加え遠心分離）を行い、浮遊物を回収し、水洗する。水洗後、酢酸処理を行い、続けてアセトリシス処理（無水酢酸9：1濃硫酸の割合の混酸を加え20分間湯煎）を行う。水洗後、残渣にグリセリンを加え保存用とする。この残渣より適宜ブレラートを作製した。作製したブレラートは樹木花粉が200を超えるまで検鏡し、その間に現れる草本花粉・胞子を全て数えた。また、保存状態の良好な花粉化石を選んで単体標本（PLC.1690～1697）を作製し、写真を第6図に載せた。第6図に載せた単体標本は、パレオ・ラボに保管されている。

#### 3. 分析結果

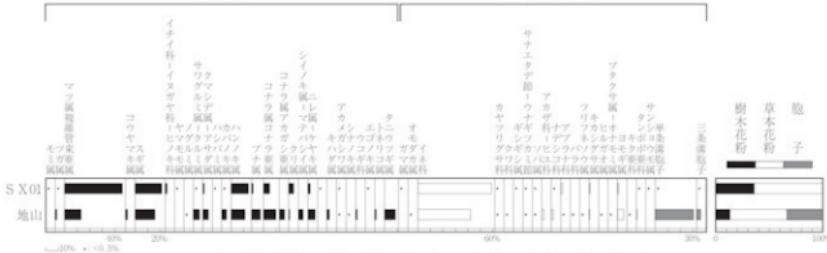
検鏡の結果、2試料から検出された花粉は、樹木花粉27、草本花粉19、形態分類を含むシダ植物胞子3の、総計49である。これらの花粉・胞子の一覧を第3表に、分布図を第7図に示す。分布図における樹木花粉の産出率は樹木花粉総数を基数とした百分率、草本花粉と胞子の産出率は産出花粉胞子総数を基数とした百分率で示してある。また、図表においてハイフン(–)で結んだ分類群は、それらの分類群間の区別が困難なものを示す。さらに、クワ科やバラ科の花粉には樹木起源と草本起源のものがあるが、各々に分けるのが困難なため、便宜的に草本花粉に一括して入れてある。

地山の樹木花粉では、マツ属複維管東亜属やスギ属、ハンノキ属、ブナ属、コナラ属コナラ亜属、シイノキ属～マテバシイ属、ニレ属～ケヤキ属、タニウツギ属などの産出が目立ち、それぞれの産出率はマツ属複維管東亜属が13%、スギ属が16%、ハンノキ属が11%、ブナ属が7%、コナラ属コナラ亜属が10%、シイノキ属～マテバシイ属が4%、ニレ属～ケヤキ属が6%、タニウツギ属が9%である。草本花粉では、イネ科が多く産出しており、42%の産出率である。さらに、栽培植物のソバ属がわずかに産出した。

S X01覆土ではマツ属複維管東亜属の産出が多くなり、46%の産出率を示す。他の樹木花粉ではスギ属やハンノキ属の産出が目立ち、スギ属が21%、ハンノキ属が14%の産出率である。草本花粉では地山と同じくイネ科が多く産出しており、59%の産出率である。さらに、栽培植物のソバ属がわずかに産出した。

学名	和名	S X07	地山
樹木			
<i>Abies</i>	モミ属	1	-
<i>Tsuga</i>	ツガ属	1	2
<i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>	マツ属複維管束系属	101	26
<i>Sciadopitys</i>	コウヤマキ属	-	3
<i>Cryptomeria</i>	スギ属	47	32
Taxaceae - Cephalotaxaceae - Cupressaceae	イチイ科 - イヌガヤ科 - ヒノキ科	4	-
<i>Myrica</i>	ヤマモモ属	1	-
<i>Platycarya</i>	ノグリミ属	-	1
<i>Pterocarya</i> - <i>Juglans</i>	サワグルミ属 - クルミ属	1	10
<i>Carpinus</i> - <i>Ostrya</i>	クマシデ属 - アサガ属	2	9
<i>Corylus</i>	ハシバミ属	1	-
<i>Betula</i>	カバノキ属	1	8
<i>Alnus</i>	ハンノキ属	30	22
<i>Fagus</i>	ブナ属	2	14
<i>Quercus</i> subgen. <i>Lepidobalanus</i>	コナラ属コナラ系属	11	20
<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>	コナラ属アカガシ系属	-	5
<i>Castanea</i>	クリ属	9	2
<i>Castanopsis</i> - <i>Passania</i>	シイノキ属 - マテバシイ属	-	8
<i>Ulmus</i> - <i>Zelkova</i>	ニレ属 - ケヤキ属	5	12
<i>Celtis</i> - <i>Aphananthe</i>	エノキ属 - ムクノキ属	1	-
<i>Phellodendron</i>	キハダ属	-	3
<i>Mallotus</i>	アカメガシワ属	1	1
<i>Tilia</i>	シナノキ属	-	1
Araliaceae	ウコギ科	-	2
<i>Syrax</i>	エゴノキ属	1	-
<i>Fraxinus</i>	トネリコ属	-	2
<i>Weigela</i>	タニウツギ属	-	18
草本			
<i>Typha</i>	ガマ属	1	-
<i>Sagittaria</i>	オモダカ属	-	1
Gramineae	イネ科	355	625
Cyperaceae	カヤツリグサ科	1	5
Moraceae	クワ科	-	1
<i>Rumex</i>	ギシギシ属	1	-
<i>Polygonum</i> sect. <i>Persicaria</i> - <i>Echinocaulon</i>	サナエタデ節 - ウナギツカミ節	1	6
<i>Fagopyrum</i>	ソバ属	1	3
Cyperodiaceae - Amaranthaceae	アカザ科 - ヒユ科	-	22
Caryophyllaceae	ナデシコ科	1	22
Brassicaceae	アブラナ科	9	3
Rosaceae	バラ科	-	1
<i>Impatiens</i>	ワリフネツウ属	-	1
<i>Rotala</i>	キカシグサ属	5	8
<i>Calystegia</i>	ヒルガオ属	-	1
<i>Ambrosia</i> - <i>Xanthium</i>	ブタクサ属 - オナモミ属	-	3
<i>Artemisia</i>	日毛ギ属	4	70
Tubuliflorae	キク亜科	-	5
Liguliflorae	タンボボ亜科	1	8
シダ植物		-	-
<i>Salvinia</i>	サンショウモ属	1	-
monolete type spore	單胞溝胞子	2	454
trilete type spore	三胞溝胞子	3	48
Arboreal pollen	樹木花粉	220	201
Nonarboreal pollen	草本花粉	380	785
Spores	シダ植物胞子	6	502
Total Pollen & Spores	花粉・胞子粒数	606	1488
unknown	不明	5	4

第3表 産出花粉胞子一覧表



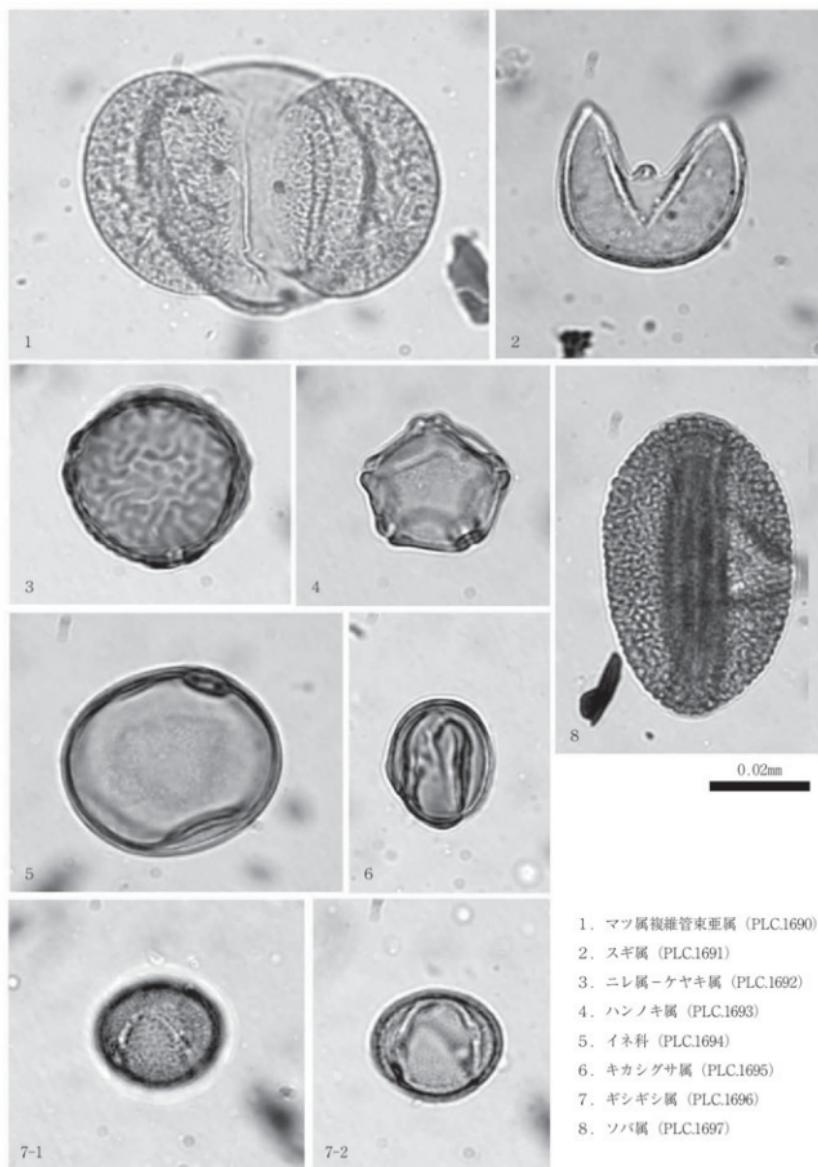
第5図 惣領浦之前遺跡における花粉分布図

#### 4. 考察

地山とS X01覆土から産出した花粉化石群集を比べると、地山では、ノグレミ属やカバノキ属、サワグルミ属・クルミ属、コナラ属コナラ亜属、キハダ属、ウコギ科、タニウツギ属など陽樹を含む分類群が多く産出しており、産出率も高い。よって、地山堆積時の遺跡周辺は比較的開けた場所で、日の当たる場所には上記の分類群からなる落葉広葉樹林が広がっていた可能性がある。また、スギ林やコナラ属アカガシ亜属とシノキ属・マテバシイ属などからなる照葉樹林、低湿地では、ハンノキ林なども分布を広げていたと思われる。草本花粉ではイネ科やシダ植物胞子の産出率が高く、遺跡周辺にはイネ科植物を筆頭に、アカザ科・ヒユ科、ナデシコ科、ヨモギ属などの草本類やシダ植物が生育していたと思われる。さらに、水生植物のオモダカ属やキカシグサ属の産出も見られ、ハンノキ林が成立するような湿地的環境に生育していたと思われる。一方で、地山層では栽培植物のソバ属が検出された。ソバは虫媒花で広範間に花粉を散布させないと考えられるため、遺跡周辺にソバが存在していたと考えられる。あるいは、水生植物のオモダカ属やキカシグサ属は水田雑草を含む分類群としても知られており、イネ科花粉の産出と合わせて考えると、水田稲作が行われていた可能性もある。地山とされる層ではあるが、栽培活動など何らかの人間活動があった可能性がある。

S X01覆土では、陽樹を含む落葉広葉樹林や照葉樹林要素の花粉が減り、マツ属複維管束亜属の産出が多くなる。よって、中世の時期になると、ニヨウマツ類の二次林が分布を広げていたと思われる。スギ属やハンノキ属は依然として産出が多く、遺跡周辺にはスギ林やハンノキ林は継続して存在していたと思われる。ハンノキ林が成立するような湿地の環境にはガマ属やキカシグサ属、サンショウウモ属などの好湿性植物も生育していたと思われる。さらに、イネ科が多く産出しており、遺跡周辺にはイネ科の草本類が生育していた。あるいは、水田雑草を含む分類群としても知られるキカシグサ属と共に産しているため、遺跡周辺において水田稲作が行われていた可能性も考えられる。ソバ属も産出しており、中世にはソバ栽培が行われていた可能性もある。

(株式会社パレオ・ラボ 森 将志)



1. マツ属複管束亞属 (PLC.1690)  
 2. スギ属 (PLC.1691)  
 3. ニレ属-ケヤキ属 (PLC.1692)  
 4. ハンノキ属 (PLC.1693)  
 5. イネ科 (PLC.1694)  
 6. キカシグサ属 (PLC.1695)  
 7. ギシギシ属 (PLC.1696)  
 8. ソバ属 (PLC.1697)

第6図 惣領浦之前遺跡 S X 01から産出した花粉化石

## 第2節 珪藻分析

### 1.はじめに

珪藻は、10~500 $\mu\text{m}$ ほどの珪酸質殻を持つ单細胞藻類で、殻の形や刻まれた模様などから多くの珪藻種が調べられ、現生の生態から特定環境を指標する珪藻種群が設定されている（小杉、1988；安藤、1990）。一般的に、珪藻の生育域は海水域から淡水域まで広範囲に及び、中には河川や沼地などの水成環境以外の陸地においても、わずかな水分が供給されるジメジメとした陸域環境（例えばコケの表面や湿った岩石の表面など）に生育する珪藻種が知られている。こうした珪藻群集の性質を利用して、堆積物中の珪藻化石群集の解析から、過去の堆積物の堆積環境について知ることができる。

ここでは、氷見市に所在する惣領浦之前遺跡の凹地S X07から採取された土層堆積物試料中の珪藻化石群集を調べ、S X01の堆積環境について検討した。

### 2. 試料と方法

試料は、凹地であるS X01の土層堆積物1点である（第4表）。惣領浦之前遺跡では、同一層から中世の遺物が出土しており、中世の堆積物と考えられている。

試料について以下の処理を行い、珪藻分析用プレパラートを作製した。

- (1) 濡潤重量約1.0 gを取り出し、秤量した後ビーカーに移して30%過酸化水素水を加え、加熱・反応させ、有機物の分解と粒子の分散を行った。
- (2) 反応終了後、水を加え1時間程してから上澄み液を除去し、細粒のコロイドを捨てる。この作業を15回ほど繰り返した。
- (3) 懸濁残渣を遠心管に回収し、マイクロビペットで適量取り、カバーガラスに滴下し乾燥させた。乾燥後は、マウントメディアで封入しプレパラートを作製した。

作製したプレパラートは顕微鏡下1000~600倍（原則1000倍）で観察し、珪藻化石200個体以上について同定・計数した。珪藻殻は、完形と非完形（原則として半分程度残っている殻）に分けて計数し、完形殻の出現率として示した。試料の処理重量とプレパラート上の計数面積から堆積物1 g当たりの殻数を計算した。また、保存状態の良好な珪藻化石を選び、第8図を作製した。

### 3. 珪藻化石の環境指標種群

珪藻化石の環境指標種群は、主に小杉（1988）および安藤（1990）が設定し、千葉・澤井（2014）により再検討された環境指標種群に基づいた。なお、環境指標種群以外の珪藻種については、淡水種は広布種（W）として、汽水種は汽水不定・不明種（？）として、その他の種はまとめて不明種（？）として扱った。また、破片のため属レベルの同定にとどめた分類群は、その種群を不明（？）として扱った。

以下に、小杉（1988）が設定した海水～汽水域における環境指標種群と安藤（1990）が設定した淡水域における環境指標種群の概要を示す。

分析No	遺構	試料	時期	堆積物の特徴	備考
1	S X01	覆土	中世	黒褐色（2.5Y 3/2）細粒砂質シルト（炭化物粒を少量含む）	中世遺物を含む遺構覆土

第4表 惣領浦之前遺跡S X01堆積物の特徴

【外洋指標種群（A）】：塩分濃度が35‰以上の外洋水中を浮遊生活する種群である。

【内湾指標種群（B）】：塩分濃度が26～35‰の内湾水中を浮遊生活する種群である。

【海水藻場指標種群（C1）】：塩分濃度が12～35‰の水域の海藻や海草（アマモなど）に付着生活する種群である。

【海水砂質干潟指標種群（D1）】：塩分濃度が26～35‰の水域の砂底（砂の表面や砂粒間）に付着生活する種群である。この生育場所には、ウミナリ類、キサゴ類、アサリ、ハマグリ類などの貝類が生活する。

【海水泥質干潟指標種群（E1）】：塩分濃度が12～30‰の水域の泥底に付着生活する種群である。この生育場所には、イボウミニナ主体の貝類相やカニなどの甲殻類相が見られる。

【汽水藻場指標種群（C2）】：塩分濃度が4～12‰の水域の海藻や海草に付着生活する種群である。

【汽水砂質干潟指標種群（D2）】：塩分濃度が5～26‰の水域の砂底（砂の表面や砂粒間）に付着生活する種群である。

【汽水泥質干潟指標種群（E2）】：塩分濃度が2～12‰の水域の泥底に付着生活する種群である。淡水の影響により、汽水化した塩性湿地に生活するものである。

【上流性河川指標種群（J）】：河川上流部の渓谷部に集中して出現する種群である。これらは、殻面全体で岩にぴたりと張り付いて生育しているため、流れによってはぎ取られてしまうことがない。

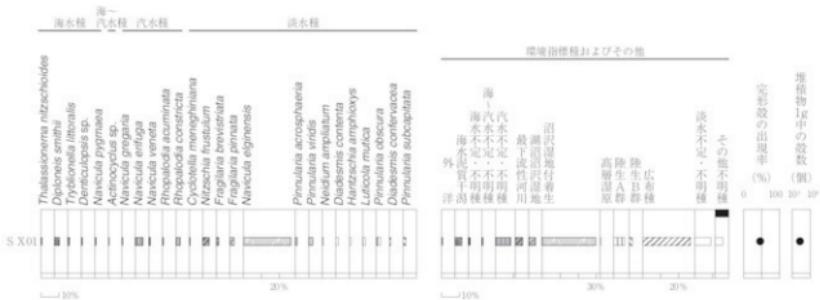
【中～下流性河川指標種群（K）】：河川の中～下流部、すなわち河川沿いで河成段丘、扇状地および自然堤防、後背湿地といった地形が見られる部分に集中して出現する種群である。これらの種には、柄またはさやで基物に付着し、体を水中に伸ばして生活する種が多い。

【最下流性河川指標種群（L）】：最下流部の三角州の部分に集中して出現する種群である。これらの種には、水中を浮遊しながら生育している種が多い。これは、河川が三角州地帯に入ると流速が遅くなり、浮遊

No.	分類群	種群	1
1	<i>Aetinocephalus</i> <i>ingens</i>	A	1
2	<i>Denticulopsis</i> sp.	?	1
3	<i>Diploneis</i> <i>smithii</i>	E1	6
4	<i>Navicula</i> <i>pygmaea</i>	?	1
5	<i>Thalassionema</i> <i>nitzschioides</i>	A	1
6	<i>Tryblionella</i> <i>littoralis</i>	E1	2
7	<i>Navicula</i> <i>gregaria</i>	?	1
8	<i>N.</i> <i>erugosa</i>	?	9
9	<i>N.</i> <i>veneta</i>	?	2
10	<i>Rhopalodia</i> <i>acuminata</i>	?	1
11	<i>R.</i> <i>constricta</i>	?	5
12	<i>Aechmanthes</i> spp.	W	7
13	<i>Amphora</i> <i>copulata</i>	W	3
14	<i>A.</i> <i>ovalis</i>	W	1
15	<i>Caloneis</i> <i>bacillum</i>	W	3
16	<i>C.</i> <i>silicula</i>	W	3
17	<i>C.</i> sp.	?	1
18	<i>Cyclotella</i> <i>meneghiniana</i>	L	1
19	<i>Cymbella</i> <i>mesiana</i>	W	1
20	<i>C.</i> <i>naviculiformis</i>	W	1
21	<i>Diadesmis</i> <i>convervacea</i>	Qb	1
22	<i>D.</i> <i>contenta</i>	Qa	3
23	<i>Fragilaria</i> <i>brevistriata</i>	N	3
24	<i>F.</i> <i>pinnata</i>	N	5
25	<i>Gyrosigma</i> <i>scalprordes</i>	W	1
26	<i>Hantzschia</i> <i>amphioxys</i>	Qa	2
27	<i>Luticula</i> <i>mustica</i>	Qa	3
28	<i>Navicula</i> <i>cuspidata</i>	W	3
29	<i>N.</i> <i>elginensis</i>	O	56
30	<i>N.</i> <i>laevissima</i>	W	1
31	<i>N.</i> <i>phyllpepa</i>	W	2
32	<i>N.</i> <i>tenua</i>	W	1
33	<i>N.</i> <i>viridula</i>	W	1
34	<i>N.</i> spp.	?	9
35	<i>Neidium</i> <i>affine</i>	W	1
36	<i>N.</i> <i>affine</i> var. <i>longiceps</i>	W	1
37	<i>N.</i> <i>ampliatum</i>	P	1
38	<i>N.</i> sp.	?	1
39	<i>Nitzschia</i> <i>frustulum</i>	L	8
40	<i>N.</i> <i>palea</i>	W	4
41	<i>N.</i> spp.	?	6
42	<i>Pinnularia</i> <i>acrosphaeria</i>	O	2
43	<i>P.</i> <i>interrupta</i>	W	3
44	<i>P.</i> <i>major</i>	W	1
45	<i>P.</i> <i>microstauron</i>	W	3
46	<i>P.</i> <i>obscura</i>	Qa	5
47	<i>P.</i> <i>subcapitata</i>	Qb	3
48	<i>P.</i> <i>viridis</i>	O	5
49	<i>P.</i> spp.	?	2
50	<i>Rhopalodia</i> <i>gibberula</i>	W	3
51	<i>Sellaphora</i> <i>papula</i>	W	5
52	<i>Stauroneis</i> <i>anceps</i>	W	3
53	<i>Suerella</i> <i>minuta</i>	W	2
54	<i>S.</i> <i>tenua</i>	W	2
55	Unknown	?	9
1	外 水 訂	A	2
2	海 水 泥 質 干 潟	E1	8
3	海水不定・不明種	?	2
4	汽水不定・不明種	?	18
5	最 下 流 性 河 川	L	9
6	湖 滔 沼 泽 濕 地	N	8
7	沼 泽 濕 地 付 着 生	O	63
8	高 原 濕 原	P	1
9	陸 生 A 群	Qa	13
10	陸 生 B 群	Qb	4
11	広 布 種	W	56
12	淡 水 不 定・不 明 種	?	19
13	そ の 他 不 明 種	?	9
	海 水 種		12
	汽 水 種		18
	淡 水 種		173
	合 計		212
	完形殻の出現率(%)		45.8
	堆積物 1 g 中の殻数(個)		4.3E+05

(種群は、千葉・津井(2014)による)

第5表 S X01堆積物中の珪藻化石産出表



第7図 堆積物中の珪藻化石分布図（主な分類群を表示）

生の種でも生育できるようになるためである。

〔湖沼浮遊生指標種群（M）〕：水深が約1.5m以上で、岸では水生植物が見られるが、水底には植物が生育していない湖沼に出現する種群である。

〔湖沼沼澤地指標種群（N）〕：湖沼における浮遊生種としても、沼澤湿地における付着生種としても優勢な出現が見られ、湖沼・沼澤湿地の環境を指標する可能性が大きい種群である。

〔沼澤湿地付着生指標種群（O）〕：水深1 m内外で、一面に植物が繁殖している所および湿地において、付着の状態で優勢な出現が見られる種群である。

〔高層湿原指標種群（P）〕：尾瀬ヶ原湿原や霧ヶ峰湿原などのように、ミズゴケを中心とした植物群落および泥炭層の発達が見られる場所に出現する種群である。

〔陸域指標種群（Q）〕：上述の水域に対して、陸域を生息地として生活している種群である（陸生珪藻と呼ばれている）。

〔陸生珪藻A群（Qa）〕：耐乾性の強い特定のグループである。

〔陸生珪藻B群（Qb）〕：A群に随伴し、湿った環境や水中にも生育する種群である。

#### 4. 結果および考察

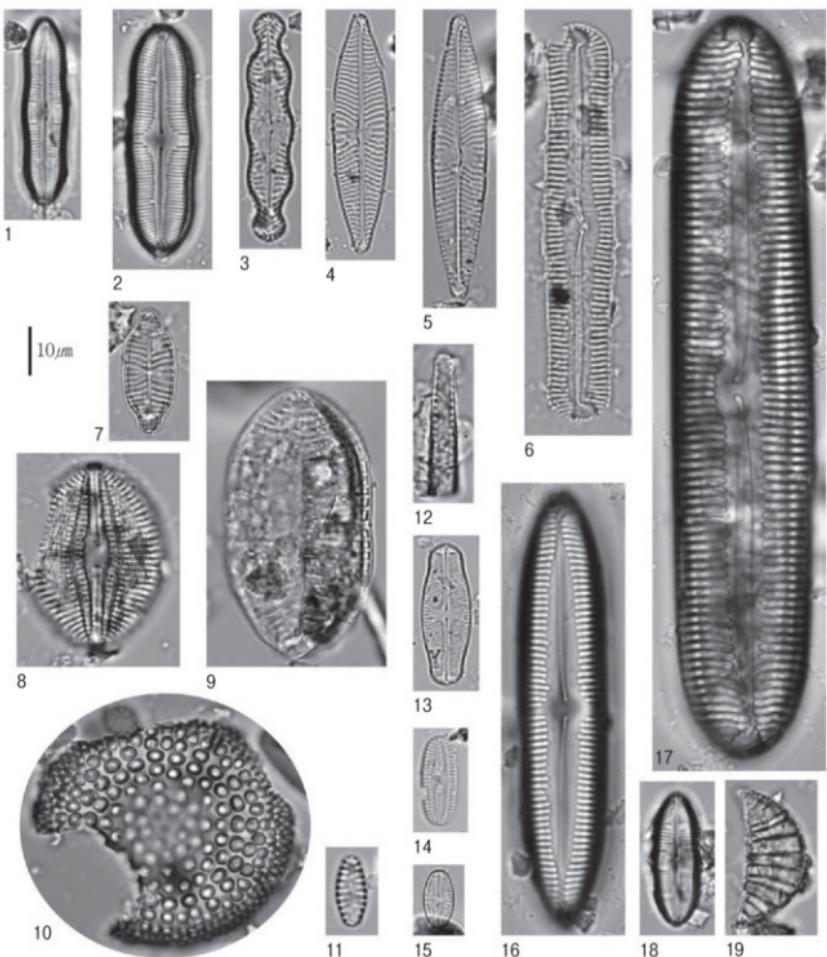
堆積物から検出された珪藻化石は、海水種が6分類群6属5種、汽水種が5分類群2属5種、淡水種が43分類群18属36種1変種であった（第5表）。これらの珪藻化石は、海水域における2環境指標種群（A、E1）、淡水域における6環境指標種群（L、N、O、P、Qa、Qb）に分類された（第7図）。

〔No.1（S X01、中世）〕

堆積物 1 g 中の珪藻殻数は  $4.3 \times 105$  個、完形殻の出現率は 45.8% である。主に淡水種からなり、汽水種と海水種を伴う。堆積物中の珪藻殻数は多い。環境指標種群では、沼澤湿地付着生指標種群（O）が多く、陸生珪藻 A 群（Qa）、最下流性河川指標種群（L）、湖沼沼澤地指標種群（N）などの淡水種や、汽水種と海水種を伴う。

環境指標種群の特徴から、ジメジメとした陸域を伴う沼澤湿地などの淡水域環境が推定される。なお、今回産出した海水種には基盤層からの誘導化石と考えられる *Denticulopsis* sp.などが含まれている。

（株式会社パレオ・ラボ 野口 真利江）



1. *Caloneis silicula* 2. *Caloneis silicula* 3. *Pinnularia interrupta* 4. *Navicula erifuga* 5. *Navicula erifuga*  
 6. *Pinnularia acrosphaeria* 7. *Navicula elginiensis* 8. *Diploneis smithii* 9. *Tryblionella littoralis* 10. *Actinocyclus ingens*  
 11. *Fragilaria pinnata* 12. *Thalassionema nitzschiooides* 13. *Sellaphora pupula* 14. *Navicula tenera* 15. *Luticola mutica*  
 16. *Pinnularia viridis* 17. *Pinnularia viridis* 18. *Caloneis bacillum* 19. *Rhopalodia acuminata*

第8図 惣領浦之前遺跡 S X01堆植物中の珪藻化石の顯微鏡写真

#### 引用文献

- 安藤一男 (1990) 淡水産珪藻による環境指標種群の設定と古環境復元への応用. 東北地理. 42, 73-88.  
 千葉 崇・澤井裕紀 (2014) 環境指標種群の再検討と更新. Diatom. 30, 7-30.  
 小杉正人 (1988) 硅藻の環境指標種群の設定と古環境復元への応用. 第四紀研究. 27, 1-20.

## 第5章　まとめ

今回の調査で得られた知見を整理しまとめにかえたい。

### (1) 縄文～弥生時代

遺構は確認できなかったが、縄文から弥生時代にかけての遺物として、弥生土器・珪化木製擦切具・砂岩製石錘・横山真脇石製剥片が出土した。隣接する能越自動車道2003A・B地区では、縄文時代後期初頭～晚期、弥生時代後期～終末期にかけての遺構・遺物が確認されており、これらのいずれかの時期に属するもの推定できる。

### (2) 古代

古代遺物包含層下から検出した遺構は溝S D01のみである。遺構内からは遺物が出土していないが<sup>6</sup>、古代を遡る遺物も本調査区からの出土がほとんどないため、古代に属するものと推定する。

本調査区の北側には東西方向に走る旧河道S D 1が2003A・B地区で確認されており、この旧河道S D 1より南側は遺構が希薄であるが、北側では掘立柱建物群、和同開珎、瓦塔、円面鏡・転用鏡、「小郡」「本家」「中家」等と記載された墨書き土器、漆が付着する土器など8世紀後半から9世紀にかけての遺構・遺物が確認され、水運流通を基盤に置く公的様相の強い遺跡である（財團法人富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所2010）。

本調査区の地山（第V層）の花粉分析ではイネ科やソバ属などの花粉が検出されており、水田雑草を含む分類群であるキカシグサ属が共産しているため水田の存在を推測した（第4章参照）。既往の調査を考慮すると、旧河道S D 1より北側に官衙の集落、旧河道S D 1から鞍骨川にかけてのエリアで水田耕作がなされていたと推測できる。

### (3) 中世

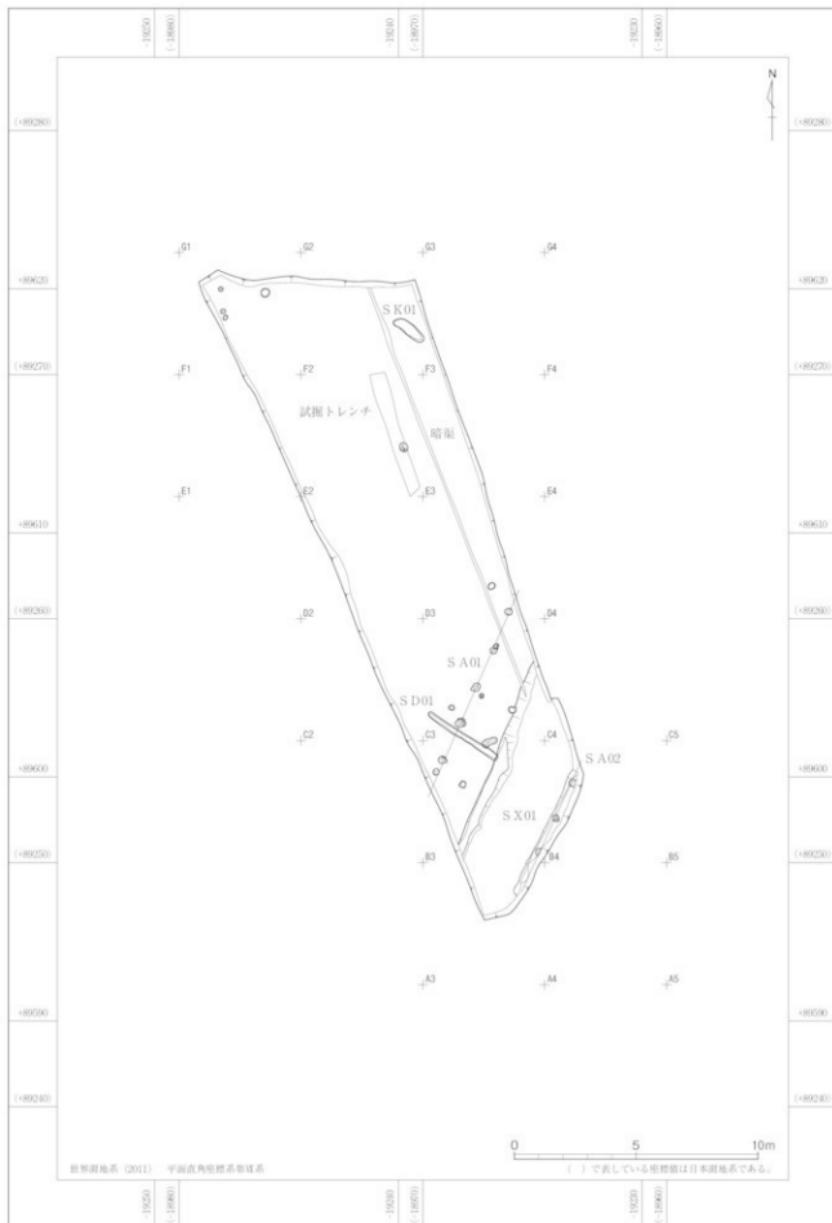
柵址S A01・02と凹地S X01は方位をおおよそN-25°-Eと共に通しており、附隨施設の可能性が推定できる。水路の側に柵列を設ける例の1つとして、イネの稲架掛け作業が上げられる。昭和40年代中頃までは水見市十二町潟で刈り取った稲を田舟であるタズル（オオフネ）で運び、岸沿いで稲架掛けを行っていた。昭和27年頃の射水平野ではタズル（射水平野ではタズリ）を用いて客土作業をしており（富山県農地部耕地課1952）、その舟の大きさはタズル（テンマ）クラスで、後から人が推して使用している。高岡市中曾根西遺跡では、こうしたタズルを用いた跡と推定できる溝が出土しており（高岡市教育委員会2010）、その規模は幅0.8~2.2m、深さ9~14cmと非常に浅い。これらの類例から、S X01は舟を利用し刈り取った稲を集め、S A01・02を稲架掛けとして利用したもの可能性がある。

また、S X01の花粉分析や珪藻分析からは淡水の水田環境や沼沢湿地であることが判明しており、さらに湿田環境であれば田舟を使用した可能性がある。

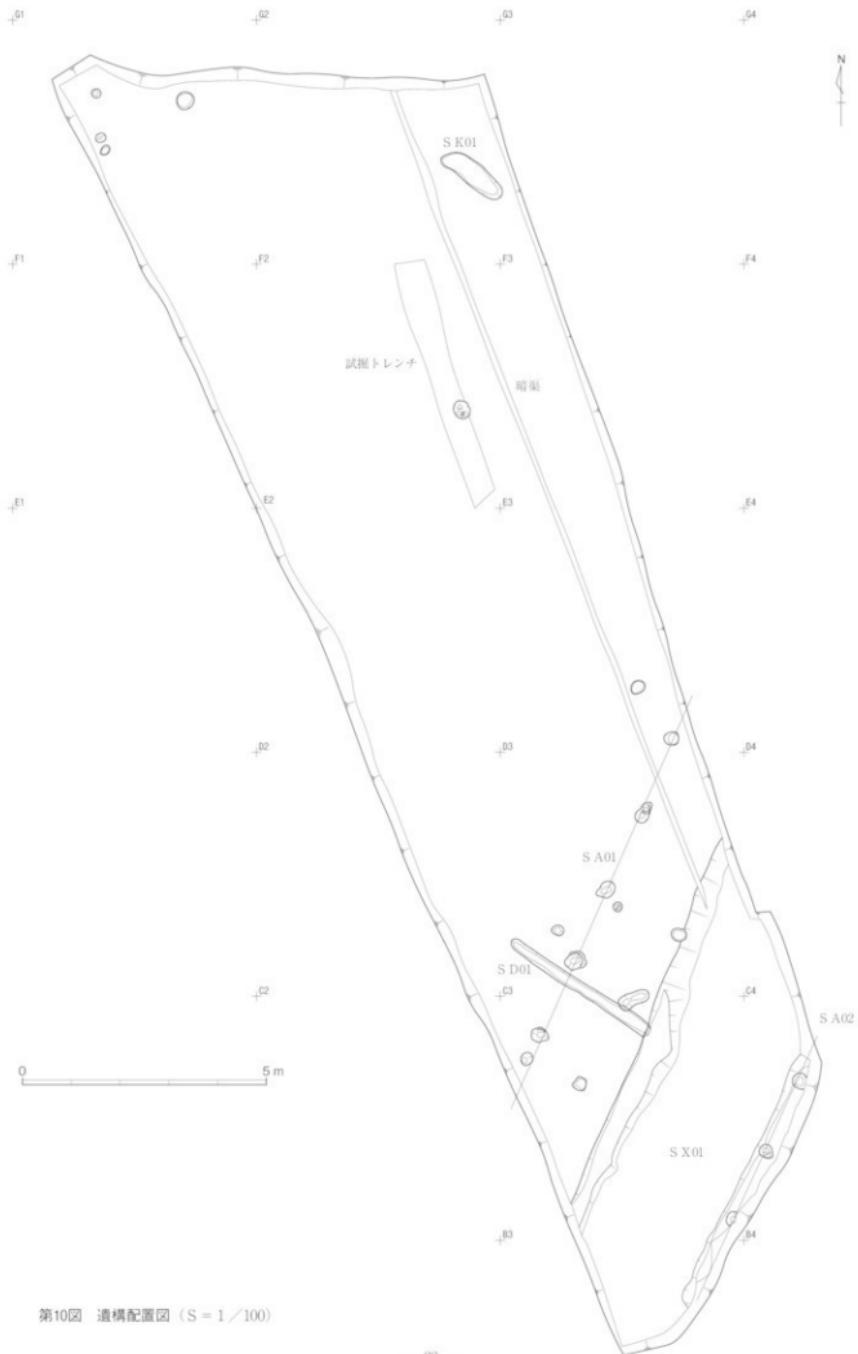
S X01の時期は、珠洲焼（V期）と越中瀬戸が出土していることから、15~16世紀以降のものと推定する。

## 引用・参考文献

- 財団法人富山県文化振興財团埋蔵文化財調査事務所 2010 「惣領浦之前遺跡・惣領野際遺跡発掘調査報告 一能越自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告Ⅸ-1」 富山県文化振興財団埋蔵文化財発掘調査報告第45集
- 高岡市教育委員会 2010 「中曾根西遺跡調査報告Ⅱ」 高岡市埋蔵文化財調査報告第22冊
- 富山県農地部耕地課 1952 「放生津潟沿岸排水改良事業誌」
- 水見市 1963 『水見市史』
- 水見市 1999 『水見市史』 9 資料編7 自然環境
- 水見市 2000 『水見市史』 6 資料編4 民俗、神社・寺院
- 水見市 2002 『水見市史』 7 資料編5 考古
- 水見市 2006 『水見市史』 1 通史編1 古代・中世・近世
- 水見市教育委員会 2001 『水見の山城』 郷土読本第14集
- 水見市教育委員会 2008 『水見市遺跡地図〔第三版〕【改訂版】』 水見市埋蔵文化財調査報告第51冊
- 水見市教育委員会 2015 『水見市内遺跡発掘調査概報V 一般国道415号道路改築事業に伴う試掘調査ほか』
- 水見市埋蔵文化財調査報告第66冊
- 水見市立博物館 2015 「特別展 とやまの船と船大工 一船が支えた人びとのくらしー」
- 廣瀬 直樹 2007 「ズッタとイクリ ~水見十二町潟と射水平野の潟舟・川舟~」『水見市立博物館年報』第25号
- 水見市立博物館
- 吉岡 康暢 1994 『中世須恵器の研究』 吉川弘文館
- 和船建造技術を後世に伝える会 2008 『水見の和船』 和船建造技術を後世に伝える会調査報告書Ⅱ



第9図 調査区全体図 ( $S = 1/200$ )



第10図 遺構配置図 (S = 1 / 100)

S

N

L=8.0m



第11図 調査区東壁土層断面図 (S = 1 / 40)

S

N

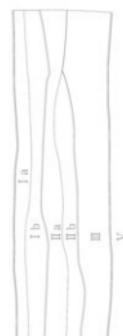
L=8.0m



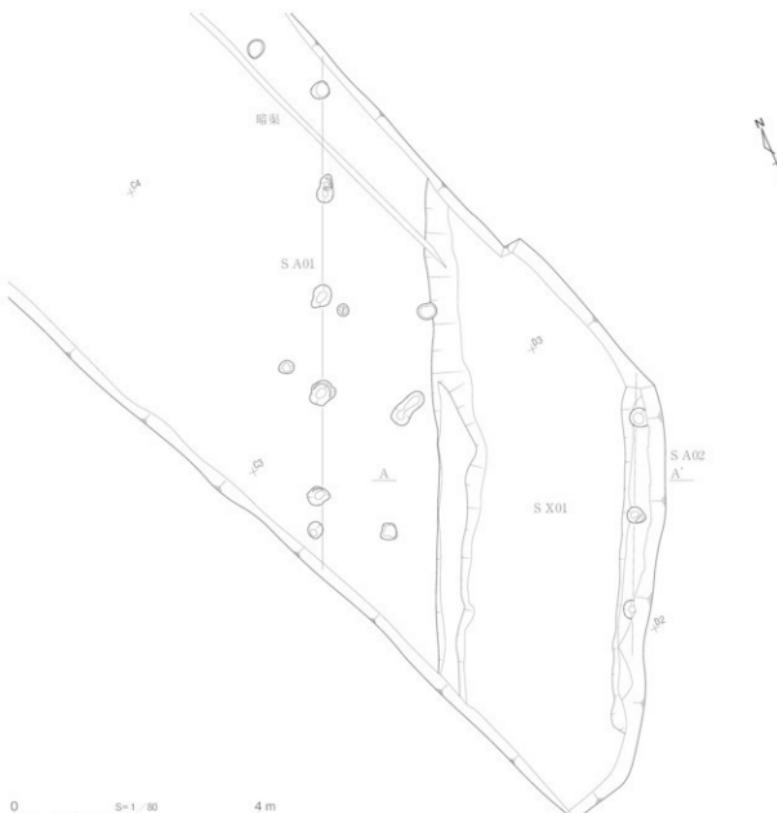
N

S

L=8.0m



第11図 調査区東壁土層断面図 (S = 1 / 40)



L=7.40m A-

N 1 (III)

A'

#### 基本層序

IV. Hu2.5Y5/1 黄灰色細粒砂質シルト

S X01

1. Hu2.5Y3/2 黒褐色細粒砂質シルト（第Ⅲ層と同一）

2. Hu10YR4/1 開灰色粘土質シルト



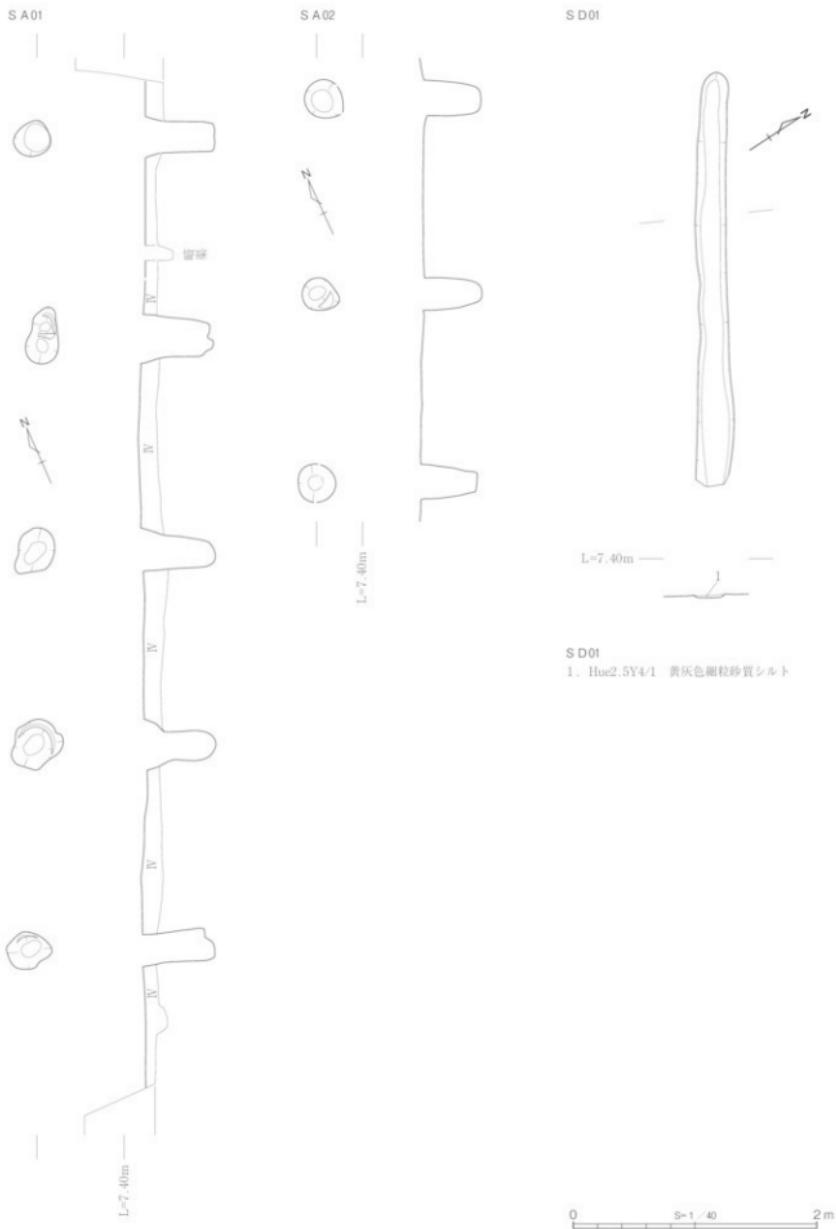
L=7.40m ——

S K01

1. Hu2.5Y4/1 黄灰色粘土質シルト

0 S=1/40 2m

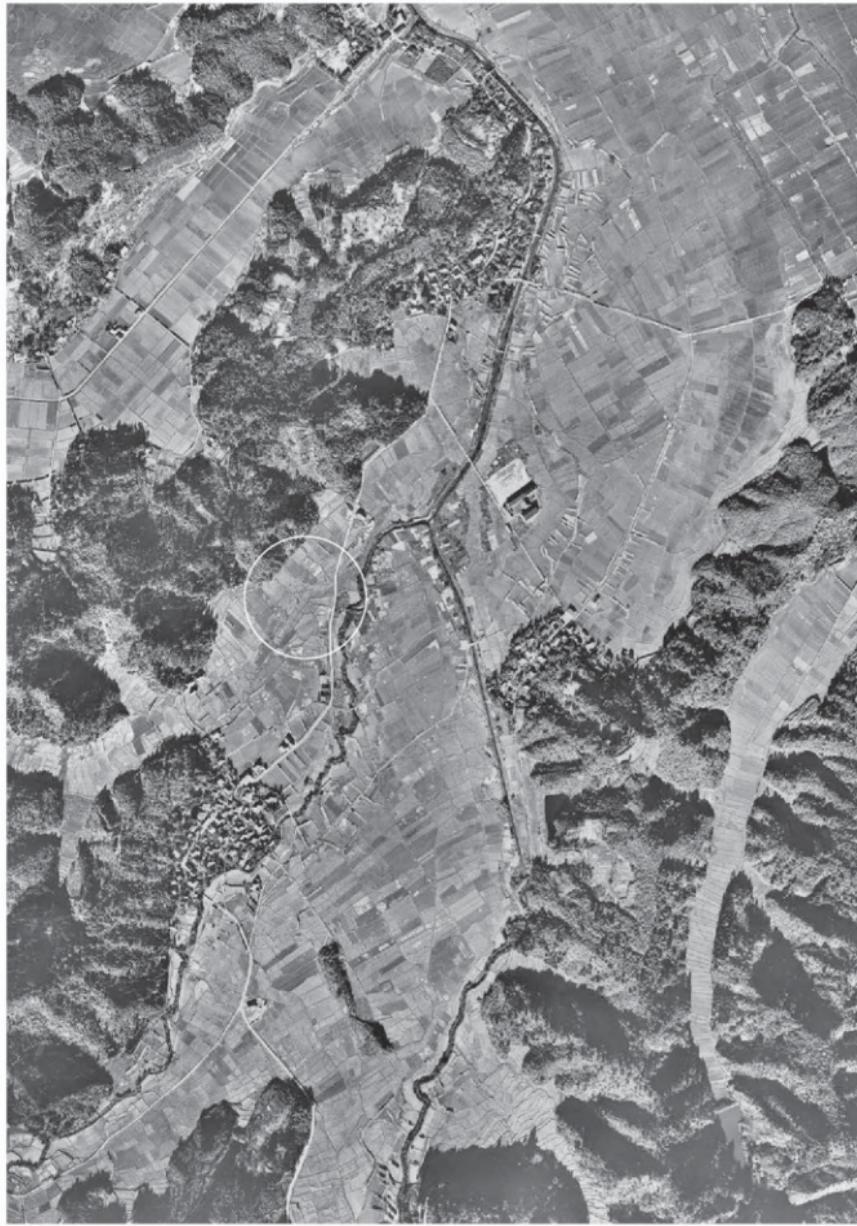
第12図 遺構実測図 (1) S A01・02、S X01 (平面図 S = 1/80、断面図 S = 1/40)  
S K01 (平面図・断面図 S = 1/40)



第13図 遺構実測図（2） SA01・02、SD01（平面図・断面図 S = 1 / 40）



第14図 遺物実測図（1～15は $S = 1/3$ 、16～18は $S = 1/2$ ）



図版 1 遺跡周辺空中写真  
白丸が物語浦之前遺跡の位置  
米軍撮影の空中写真 (1952年撮影)



図版2 遺跡周辺空中写真  
白丸が物領浦之前遺跡の位置  
国土地理院撮影の空中写真 (2009年撮影)



図版3 1. 調査区全景（北西から） 2. 調査区全景（西から）



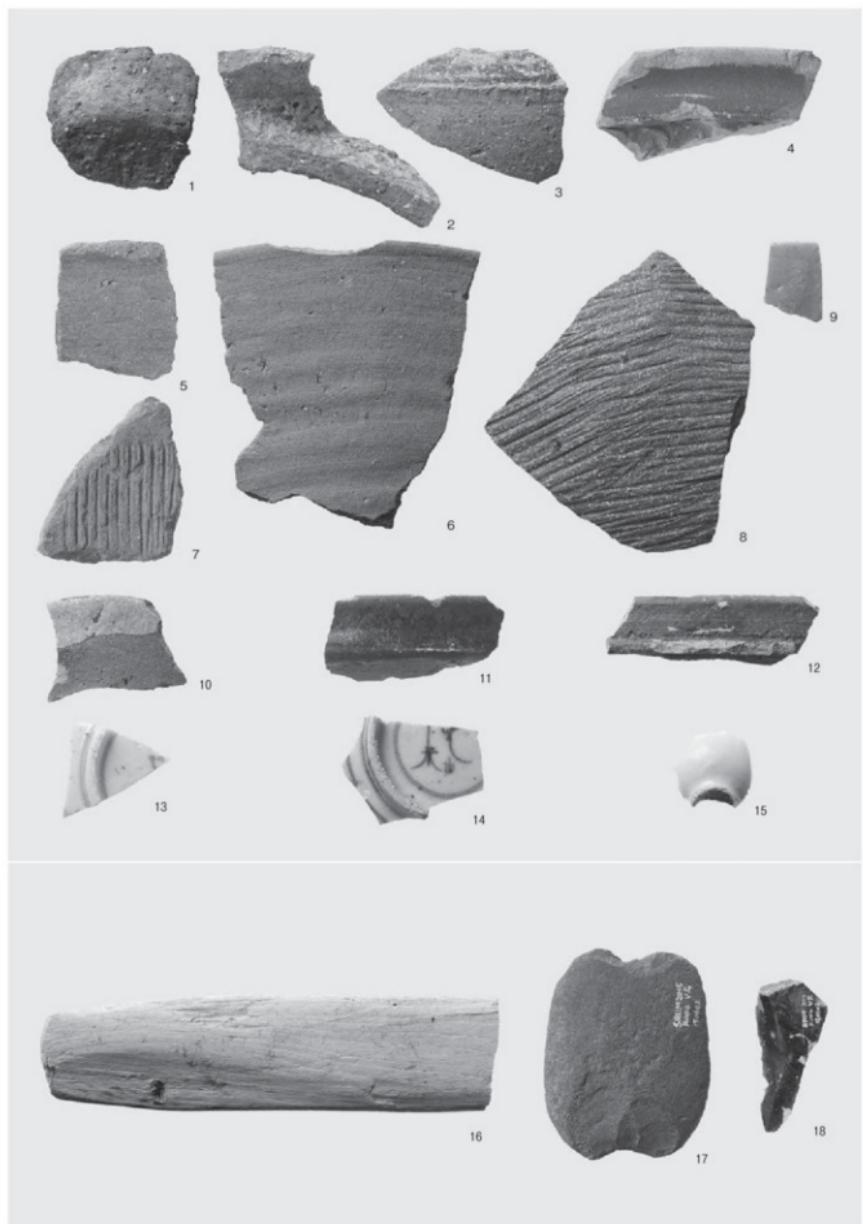
図版4 1. SA01・SX01検出状況（西から） 2. SA01・SX01検出状況（南西から）



図版5 1. SA01・SX01実掘状況（北西から） 2. SX01実掘状況（南西から）



図版6 1. SX01土層（南西から） 2. SD01土層（北西から）



図版7 遺物写真

# 報告書抄録

ふりがな	そうりょううらのまえいせき						
書名	惣領浦之前遺跡						
副書名	能越自動車道水見南IC建設に伴う発掘調査報告						
卷次							
シリーズ名	水見市埋蔵文化財調査報告						
シリーズ番号	第67冊						
編著者名	廣瀬直樹、岡田一広、森 将志、野口真利江						
編集機関	株式会社エイ・テック						
所在地	〒939-1119 富山県高岡市オフィスパーク12番地 TEL 0766(62)0388						
発行機関	水見市教育委員会						
所在地	〒935-8686 富山県水見市鞍川1060番地 TEL 0766(74)8215						
発行年月日	2016年3月14日						
ふりがな 所取遺跡	所在地	コ一ド	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
	市町村	遺跡番号	。 . .	。 . .			
惣領浦之前 遺跡	富山県水見市 惣領	016205	312	36° 48' 27"	136° 57' 3°	20150529 20150626	236m <sup>2</sup> I C建設
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
惣領浦之前 遺跡	集落	縄文～弥生		弥生土器、擦切具 石錘、横山真脇石 製剝片	中世の柵址・凹地を 検出した。		
		古代	溝	須恵器			
		中世	柵址、土坑、凹地	珠洲焼、青磁			
		近世		越中瀬戸、伊万里			
要約	惣領浦之前遺跡は、能越自動車道建設に伴う発掘調査が平成15年に実施され、今回の調査区は南西側で隣接する地区である。発掘調査の結果、中世の柵址2条と凹地を検出した。柵址と凹地の方位が同一であることから関連性が高い施設であり、周辺の民俗例から田舟を利用した柵架掛けの可能性を想定した。						

平成28年3月14日印刷  
平成28年3月14日発行  
水見市埋蔵文化財調査報告第67冊

## 惣領浦之前遺跡

能越自動車道水見南IC建設に伴う発掘調査報告  
編集 株式会社エイ・テック  
発行 水見市教育委員会  
印刷 中村印刷工業株式会社